# 手記の宛先
## ――夏目漱石「こゝろ」（「心」）の〈応答責任〉――

矢本浩司

### はじめに

本稿は、これまでに本誌で書き継いできた夏目漱石「こゝろ」論[1]の続稿である。本稿では、手記の書き手である「私」が時を経て[2]「筆を執つ」（上一）た理由と、その手記の宛先について検討する。

### 一

ラカンの〈転移〉理論[3]に「有罪性の転移」という考え方がある。第三者の無意識に潜む悪の欲望が、第三者を尊敬する主体に移り（第三者と主体との間で欲望が生成される＝〈転移〉）、主体が犯罪に手を染めることをいう。主体＝犯人は、第三者が無意識に抱く悪の欲望（例えば殺意）を、第三者に代わって実現（殺害）する。これによって、主体に〈転移〉した殺人の欲望が満足される。第三者は自己の内なる悪の欲望に無自覚だが、主体は、尊敬する第三者を観察して、第三者の無意識にある悪意を発見する（あるいは、悪意という欲望が二者間で無意識に生成される）。発見された第三者の悪意は、発見した主体の悪意に変じ、主体に殺意が芽生える。これが「有罪性の転移」の仕組みである。

たとえば、ヒッチコックの映画「私は告白する[4]」では、主人公のローガン神父を脅迫していた弁護士ヴィレットが何者かに殺害される。神父のもとで働いている下男のオットーが告解を行い、自分が弁護士を殺害したと告白する。告解に対して神父は守秘義務を負う。やがて神父に弁護士殺しの嫌疑がかかる。神父が弁護士から脅迫されていたことを警察が突き止め、神父は捕縛され、裁判が始まる。告解の守秘義務があるために、神父は公判でも真犯人（オットー）の存在を明かさないという筋で進行する。ジジェクは、この映画に「有罪性の転移」を応用し、神父のもとで働く下男が、神父が実は無意識に抱いていた欲望（弁護士への殺意）を発見し、その欲望が下男に〈転移〉して、下男が弁護士殺

しの欲望を抱いた過程を鋭く分析してみせた。[5]

この「有罪性の転移」は、実は「こゝろ」にも当てはまる。「こゝろ」は先生を慕う「私」による手記（回想録）の体裁をとるが、Kを死なせたことに長く苛まれる先生が自殺を決意して、その遺書を青年の「私」に宛てるという内容である。先生は遺書に「明治の精神」に殉じて自殺すると書くが、「明治の精神」への殉死というのは、自殺の動機としては具体的でない。先生自身も、明治天皇に殉死した乃木将軍を引き合いに、「私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかもしれません」（下五十六）と遺書に記すほどで、自死を選択する理由を明確には他人に説明できない。理由を明確に説明できない自殺願望が先生に芽生えたのは、実は自分自身への殺意という悪の欲望が先生の無意識に生成された（「有罪性の転移」が起こった）からなのである。

小森陽一氏は先生の死後に静と「私」が共生する未来を想定するが、[6] 小森氏が描く「私」と静が共生する未来は、死の直前の先生によっても予想されていたフシがある。たとえば、散歩中に新婚の夫婦を眺めて恋について議論している際に、先生は「私」に向かって、「あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないといふ不快の声が交じってゐましょう」（上十二）と言ったり、「異性と抱き合ふ順序として、まづ同性の私の所へ動いて来たのです」（上十三）と言ったりする。こうした一見何でもない散歩中の会話を、「私」はわざわざ事細かに自らの手記に書き込むわけだが、それは、この議論の背後に具体的な女性＝静を先生が想定していたからではないか。また、先生が宅を不在にし、夜分に静と「私」に一つ屋根の下での留守番を依頼したことがあったが、「私」はこの夜の記憶についても手記に詳述している。「私」は、なぜ先生の奥さんと過ごした留守番の夜を手記に詳しく書く必要があったのか。

漱石の小説には、夫婦でない男女が一つ屋根の下に身を置くシチュエーションが幾つか存在する。「三四郎」[7]では、上京途次の三四郎は名古屋で女と同衾し、「あなたはよっぽど意気地のない方ね」と女に窘められる。「行人」[8]では、兄一郎に妻の貞操を試してほしいと依頼された弟二郎が、嫂の直と大阪の旅館で一泊する。いずれの小説でも、男女の性的関係に発展してもおかしくない可能性が示唆される。「こゝろ」の「私」と静による夜の留守番を、この漱石独特のシチュエーションの一種だと捉えれば、「私」（と静）の無意識に、男女の性的な接近の欲望が生じていた可能性を読み込めないだろうか。特別な女性との特別な思い出の一夜だからこそ、「私」は手記にわざわざ詳細を書き留めたのではないか。そうだとすれば、この時の「私」の無意識には、静との接近の障壁となる夫＝先生を排除したいという欲望も同時に生じるはずだ。この無意識の欲望が実現したならば、「私」は先生に代わって夫の立場＝家長に就任することになろう。であれば、

「私」が先生夫婦の家の私的な空間を書斎から茶の間へと静に誘われることも、意味深に読めてくる。つまり、茶の間を舞台として、静と「私」は擬似的な夫婦の団欒を演じていたことになるのだ。一方、「人間全体を信用しない」（上十四）先生は、奥に下女がいるとは言え、なぜこの世で唯一の愛する妻を、「美くしい奥さん」（上四）だと静を見ている（静は「美くしい」と度々手記に書き込む）「私」と一つ屋根の下に放ったのか。かつて一つ屋根の下で、Kを出し抜いてお嬢さん（静）を奪った先生とすれば、先生の宅において、「美くしい奥さん」として妻（静）を見る若者の視線を警戒して当然ではあるまいか。泥棒が押し入る不安よりも、美しい妻と若い男が接近する不安の方が大きいはずではないか。日頃から人付き合いを避ける「外出嫌ひ」の先生が、わざわざ屋外で人と面会するのも不自然に見える。しかし、「私」が無意識に抱く欲望を察知した先生に「有罪性の転移」が生じていたとみれば、この先生の言動に説明がつく。先生を排除したいという「私」の無意識の欲望が先生に〈転移〉して、先生の無意識に、「私」と静の前から消えたいという欲望が生じた（「有罪性の転移」が起こりつつあった）のである。以前よりKの死に負い目があった先生は、「有罪性の転移」によって自殺願望を膨らませたのである。なお、「有罪性の転移」は第三者を尊敬することで成立するが、先生は「私」について「私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した」（下二）と遺書に記している。ジジェクは「自分が有罪性を転移した第三者に、見返りとして何かを期待している。見返りとは、主人の承認［再認］やもう一つの犯罪のこともある」[9]と述べるが、先生にとっての「見返り」は、「私」に先生の孤独な人生を「承認」させることと、静を頼むことであったと考えられる。さらに、子を欲していた静までも「私」の共犯的な関係者だと先生がみなしていたならば、「あなたが死んだら、何でもあなたの思ひ通りにして上げるから、それで好いぢやありませんか」（上三十五）と静が先生に言い放った言葉も、先生に自殺という犯行の「見返り」として受け取られた可能性がある。自分が死んだ後に、「私」と静が結ばれるという（「私」の欲望を通して〈転移〉した）先生の欲望について、静という「主人の承認」を得たと先生が受け止めるのである。ジジェクは「殺人に関与するのは殺人犯と犠牲者だけではなく、第三者―殺人犯はこの人物と象徴交換を執り行う―の存在が常に想定される。殺人犯は、自らの行為によりこの第三者の抑圧された欲望を現実化し、このことで第三者に負傷と有罪性を負わせる」[10]と述べる。これに従えば、「私」は、先生が犯した自殺という犯罪によって「抑圧された欲望を現実化し」、同時に「負傷と有罪性を負」うたことになる。これは、かつてKが自殺した時に先生が負った「負傷と有罪性」を「私」が反復的に負う構図でもある。死んだ先生の屍の上に自分の人生があることになる「私」は、後年（手記の現在）まで、Kを死なせて苦しんだ先生が遺書という手記を認めて

死んだように、先生を死に追いやった「負傷と有罪性」を負い続けて、ついに筆を執り、先生の遺書を真似るように「こゝろ」の手記を書いたのである。であれば、かつての先生が「私」と邂逅して（「有罪性の転移」によって）一気に死の欲動を加速させたような事態が、「私」の身の上に到来した可能性が検討されねばなるまい。今や時を経た「私」もかつての先生と同様に死の危機に瀕しているのだとすれば、それは如何なる事態によるのか。先生の死の欲動を加速させた重要人物は間違いなく「私」であるから、先生は他ならぬ「私」に遺書を宛てた。同様に、「私」が反復的に筆を執る手記も、「私」の死の欲動[11]を加速させた重要人物に宛てられている可能性を無視できない。それは誰なのか。

## 二

「こゝろ」と「坊っちゃん[12]」には共通点が多い。「こゝろ」は「私」による手記の体裁だが、「坊っちゃん」も、「おれ」による手記＝「清に出し損ねた手紙[13]」だとみなせる。「坊っちゃん」では、「おれ」の兄は、父の死後に家産を全て換金して処分し、六百円を「おれ」に分け与え、職のために九州へ赴任した。「こゝろ」でも、手記を書く「私」の兄は、職で九州へ赴任している。先生は「私」の父が存命中に家産を分けてもらえと「私」に催促している。その先生にしても、財産を全て換金して父祖の地を去っており、これも「坊っちゃん」の兄の行動と重なって見える。商業学校を出て近代化する日本の立身出世コースに乗った「坊っちゃん」の兄の行動は、働かなかった（＝前近代に取り残された）父がおそらく体現していた江戸のエートスや精神と決別したものと思われるが、父の死後に、自分が生育した住居などの家産を全て貨幣に換えて土地を去るのは、その象徴的行為であろう。「坊っちゃん」の手記の書き手である「おれ」にしても、自らを東京人とは言わずに「江戸っ子」だと名乗り、「親譲りの無鉄砲」という言葉に象徴される、父親が持っていた前近代的なエートスや精神を「譲り」受けてはいるものの、一方では、明治政府の近代教育制度である「小学校」や「私立中学校」で「フランクリン自伝」や「プッシング、ツー、ゼ、フロント」といった成功譚を読み、将来を見据えて難関の物理学校を選択して卒業し、中学教師となっている。いずれは清と居を構えることも夢想しており、当初は兄と同じく立身出世の街道に身を置いていた。[14]「こゝろ」に登場する「私」の兄にしても、「宅の事を監理する気はないか」と「私」に尋ね、「私」から「兄の腹の中には、世の中で是から仕事をしようという気が充ち満ちていた」と評されるように、故郷を捨てて立身出世街道を突き進もうとしている。同じく先生にも立身出世の気概は燻っていて[15]、学問に身を投じ、当初は立身出世の模範のように政治家に成り上がった叔父を「尊敬して」、「誇になるべき」だとも思っていた。その先生に私淑する青年も近代教育を受けて育ち、故郷を退屈と感じており、「坊っ

ちゃん」の兄や「おれ」の近代的な精神に連なっている。先生は「殉死」という古めかしい言葉に魅入られて自殺するが、「明治の精神」とは、先生が「私は決して理に暗い質ではありませんでした。然し先祖から譲られた迷信の塊も、強い力で私の血の中に潜んでゐたのです。今でも潜んでゐるでせう」（下七）と語るように、近代的な合理主義と前近代的なエートスが同居した精神である。この点でも、「坊っちゃん」の「おれ」と「こゝろ」の先生の両義的な精神は平仄を合わせる。「坊っちゃん」の「おれ」は、詐欺師の大家に書画骨董を買えと迫られるが、財産を横領していた「こゝろ」の叔父も先生の父に書画骨董を見せていた（おそらく買わせていた）。前近代的なエートスの象徴である書画骨董は、近代社会では貨幣価値として計量される。前近代のエートスを受肉している先行世代（「こゝろ」の先生の両親や「私」の父、「坊っちゃん」の「おれ」の父や清）の死後に、近代を生きる（あるいは死のうとする）世代（先生や「おれ」）の両義的に引き裂かれた精神を、「こゝろ」と「坊っちゃん」は共有しているのである。

小森陽一氏は『「坊っちゃん」』という小説の言説は、本来松山とおぼしき地方都市から、東京に居る清に宛てて書かれるはずであった、もう一通の書かれざる手紙を、清の死後に「おれ」が書いたものである。「おれ」の語る言葉の潜在的な読者は清なのである。すべての登場人物が渾名で記されているのも、「おれ」と清との間では一通目の短い手紙で、その渾名が共有されているからだ[16]」と述べている。確かに、そう考えれば、他界した清と経験を共有していない四国での出来事が「おれ」の手記の中心的な報告であることが不思議ではなくなる。「手紙をかくのが大きらい」な「おれ」が長い手記を書いたことも、手間暇をかけた「非常に長い手紙」をくれた亡き清へ報いる返信だと考えれば合点がいく。また、渾名が「おれ」と清との間での共通了解であるのと同様に、「おれ」自身や兄や父母の名前を手記の中で明かさないのも、彼らの実名が清には自明のことだと考えれば得心できる。

一方、「こゝろ」は誰を読み手に想定した手記だと考えればよいか。「私」の手記には、「何うしてあの事件を斯う長く書いて、私に見せる気になつたのだらう」（中十七）という表現がある。「あの事件」とは、先生が遺書に記したKの自殺事件のことを指す。「下」で先生の遺書が開示されるまでは、「あの事件」の全貌は「私」の手記の読者には説明されない。それにも関わらず「あの事件」と書くのは、「あの事件」と言えば察しがつく人物、事件が既知である人物を読者に想定しているからであるはずだ[17]。となれば、手記の読み手、つまり宛先として考えられるのは、そうした事情を知り得る唯一の人物、すなわち静である可能性が浮上してくる。

「こゝろ」では、静以外の登場人物の名はほとんど明かされない。手記の書き手である「私」の家族には、「坊っちゃん」と同様に、父母、兄などと関係性を示す呼称が採られている。重要な

登場人物たちは、先生やKや奥さん・未亡人（静の母）などと呼称される（ただしKや未亡人という呼称は先生の遺書を通して知れる）。静も夫のことを「先生」と呼んで「私」と会話しているし、「私」は「中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつてゐた」（上八）と書き、「二人に共通な興味のある先生」（上十七）とも書き、先生について「慰さめる私も、慰さめられる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしてゐた」（上二十）とも書いていることから、「私」と静との間で、「先生」という呼称が特別の人物と結びつく特別な人称として了解・共有されていたことがわかる。当然ながら、先生が遺書でKと呼称した人物が何者であるのかは、「私」と静との間でも共有されている（当初から静は「私」に「先生がまだ大学にゐる時分、大変仲の好い御友達が一人あつたのよ。其方が丁度卒業する少し前に死んだんです」（上十九）などと漏らしていた）。また、「私」は、先生の宅の留守番をする静の親戚と面識があり、彼女が何者であるのかを先生から聞いている（中四）。「私」は静の母の死病についても聞かされていた。静も「私」から直接話を聞いたり、手紙で知ったりして、「私」とその家族の関係や事情についての知識を持ち合わせており、「私」と静との間では、双方の親族に関する情報は共有されている。「私」の手記には、僅かに、関さん（「私」の妹の夫）や作さん（「私」の父の幼馴染み）の名前が登場するが、彼らのことが東京で話題になった可能性は低く（実際、「上」には登場しない）、静にとって既知でない可能性が高い（御光については後述）。だから、少ない事例として（静に知らしめるために）、「私」の手記に実名で登場したのではないか。なお、静が読者である場合、「其人」、「奥さんらしい人」、「奥さんの名は静といった」（上九）などの表現がやや不自然に見えなくもないが、先生も遺書の中で、「私」にとって既知である静を「其処の御嬢さん」（下十一）、「其妻君の娘」（下十一）などと突き放して書いているように、「私」が過去の「記憶を呼び起」こして手記に再現する際に、往時の呼称を選択しても不思議ではない。[18] このことは、「坊っちゃん」の手記が、「おれ」と清との間で経験を共有していない四国の出来事を中心として書かれたことと同様である。しかも、「坊っちゃん」が亡き清に書かれたのと同様で、「こゝろ」の手記も、他界した静に向けて書かれた可能性が高い。

## 三

先生は、自身の遺書が「貴方にとつても、外の人にとつても」、「他の参考に供する積」（下五十六）と記して、「私」に遺書の公開を許可する際に、「妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい」と言って、静には遺書に記された悲劇を秘密にするように求めた。「奥さんは今でもそれを知らずにゐる」（上十二）と「私」が手記に書いているのは、先生の求めに応じたからであろうが、静が死んでいる（もしくは瀕死である）から「今でもそれを知ら

ずにいる」と読むこともできる。また、先生と静の馴れ初めについて、「二人とも私には殆ど何も話して呉れなかつた」（上十二）と「私」は記すが、「呉れなかった」と過去形であるのも、先生共々静も死亡しているからだともとれる。先生は、「私」との〈転移〉的な関係によって欲望（死の欲動）を生成したが、「私」が目の前にいなくとも、書き綴りつつある遺書の向こうに第一の読み手として「私」を想定することで、遺書を創作＝欲望を生成した。同じように、「私」もまた、目の前にいない＝つまり死亡した静を第一の読み手に想定して手記を書いたと考えられる。

先生は残される静を思うと、死ぬに死ねなかった。死の欲動に憑かれた人物が辛うじて生きていた理由が妻のためであるとすれば、妻を託すに足る存在が出現すれば死ねるということになる。一方で、「私」の瀕死の父は「おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣ってくれ」（中十）と「私」に頼んでいた。「私」の病床の父と、死に憑かれた先生は、共に明治の終焉・乃木大将の殉死の影響を受ける点でも呼応するが、病気で死を覚悟する「私」の父も、やはり残される妻のことを思っている。「私」の父は妻に向かって「おれが死んだら、御前は何うする、一人で此家に居る気か」（中二）と言ったが、先生も妻に向かって「もしおれの方が先へ行くとするね。さうしたら御前何うする」（上三十四）、「おれが死んだら此家をお前に遣らう」（上三十五）と言った。「こゝろ」は様々な反復が連続する小説だが、「私」の父と先生の言葉も反復的である。「私」の父が残される妻御光を「私」に託したことが反復されて、先生も暗に「私」に静を託しているのである。先生による静への思いと呼応するものとして、「私」の手記には、「私」の父による御光への思いが書き込まれている。静と並ぶ愛の対象だからこそ、御光の名は手記に例外的に書き込まれたのである。

「こゝろ」は死者の話である。登場人物は反復的に陸続と死ぬ。[19]「私」が実家で父を看病することが反復されて、静は実家があった市ヶ谷で叔母の看病をする。この叔母の命も危うかろう。静の母は明治天皇の病死を反復して死に、先生の母は先生の父の病気を反復して死に、乃木大将の妻の「静」も乃木大将の殉死を反復して死んだのだから、この死の順列に静が反復的に加わる（病死する）可能性は打ち消せない。であれば、「奥さんは今でもそれを知らずにいる」理由として、静が死んだ可能性はやはり捨てられない。

## 四

「私」の手記における静に関係する描写は実は少なくないのだが、「私」が記憶をたどって長い手記にわざわざそれを書き込んだのは、亡くなった静との関係が成立した重要な起点を確認するためであろう。それは「坊っちゃん」と同様で、静の存命中に果たせなかった静への返信なのである。なお、静から青年へ宛てら

れた手紙と考えられるのは、手記を書く現在になっても「私」が「まだ持っている」という「絵葉書」と「紅葉の葉を一枚封じ込めた郵便」（上九）だけである。当時は「押し葉の男性同士のあいだでのやりとりは盛んである」ので、静による気配りの郵便とは断定できないとの見方[20]もあるが、「私」は「筆を執ることの嫌な先生」（中十七）だと述べ、「私」は「私は先生の生前にはたつた二通の手紙しか貰つてゐない。其一通は今いふ此簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大変長いものである」（上二十二）と述べているので、「絵葉書」や「紅葉の葉を一枚封じ込めた郵便」が静から「私」へ送られた可能性が高い。しかし、これらの静からの手紙が、時を経てから思い立って返信しなければならないものとは考えにくい。むしろ「私」の手記は静からの手紙への返信ではなく、「私」に直接投げかけられた静の肉声への返答である。先生は遺書に「あなたから過去を問ひたゞされた時、答へることの出来なかつた勇気のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得た」（中十七）と書き、「口で云ふべき所を、筆で申し上げる事にし」（中十七）たのだと書いたが、これを反復するように、「私」は静に「問ひたゞされた時」の答えを「筆で申し上げる」のである。

先生が「何か遺りたい」のに「それでゐて出来ない」理由が「解らない」から「気の毒でたまらない」と「私」に話した静は、後には「あなた何う思つて？」、「私からあゝなつたのか、それともあなたのいふ人世観とか何とかいうものから、あゝなつたのか。隠さず云つて頂戴」（上十九）と先生が豹変した理由を「私」に問う。その時の「私」は「私には解りません」と言って応答できず、「奥さんは予期の外れた時に見る憐れな表情を其咄嗟に現はした」（上十九）と手記に書き込んでいる。また静は「人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに変化できるものでせうか。私はそれが知りたくつて堪らないんです。だから其処を一つ貴方に判断して頂きたいと思うの」（上十九）とも「私」に投げかけたが、これに対しても当時の「私の判断は寧ろ否定の方に傾いてゐた」（上十九）と「私」は書き記す。静からの問いについて、「私は其晩の事を記憶のうちから抽き抜いて此処へ詳しく書いた。是を書く丈の必要があるから書いた」（上二十）と「私」は手記にことさらに断りを入れている。無論、過去の全ての記憶を手記に再現することは不可能である。「私」が「記憶を呼び起」こして、「記憶のうちから抽き抜いて此処へ詳しく書いた」手記は、「憐れな表情」を浮かべた静からの懇請的な問いへの時を経た「真面目」な返信なのである。

であれば、「今奥さんが急に居なくなつたとしたら、先生は現在のとおりで生きてゐられるでせうか」、「その位先生に忠実なあなたが急に居なくなつたら、先生は何うなるんでせう。世の中の何方を向いても面白さうでない先生は、あなたが急にゐなくなつたら後で何うなるでせう」、「あなたから見て、先生は幸福にな

るでせうか、不幸になるでせうか」との「私」からの質問に対して、「そりや私から見れば分つてゐます（先生はそう思つてゐないかも知れませんが）。先生は私を離れゝば不幸になる丈です。或は生きてゐられないかも知れませんよ」（上十七）と静が〈応答〉したことが手記に書き込まれたのも、「先生」を「青年」に置き換えて読めば、実際に「今奥さんが」「居なくなつ」てからの、手記を通した「私」と亡き静との対話としてみえてくる。つまり、手記を書くことによって、「私」は「青年は現在のとおりで生きてゐられるでせうか」、「世の中の何方を向いても面白そうでない青年は、あなたが急にゐなくなったら後で何うなるんでせう」と静に問いかけ、「そりや私から見れば分つてゐます。青年は私を離れゝば不幸になる丈です。或は生きてゐられないかも知れませんよ」という静の〈応答〉を引き出し、「私」は自死の「承認」を静から得ているのである。「私」は手記を介して亡き静との〈転移〉的な関係を生成し、まさに死の欲動を膨らませているのである。思えば、「坊っちゃん」では「おれ」が愛情を注ぐ唯一の人物である清は、「お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っております」と言って肺病で死んだ。手記を書く「おれ」は自殺するわけではないが、街鉄の技師の身分に甘んじており、「坊っちゃんは死んだ」との見方もある。[21] また、「坊っちゃん」や「こゝろ」と同じく一人称語りの「吾輩は猫である」[22]も、猫のことながら、「吾輩」のガールフレンドの三毛子は、清のように風邪をこじらせて死に、最後に「吾輩」も自殺的な溺死を遂げた。「こゝろ」の「私」もまた、これらに連なる存在なのではないか。

かつての静からの問いに対して、「私」は静から批判された「空つぽな理屈」（上十六）で応じるのではなく、先生の言動を「記憶のうちから抽き抜いて」手記に詳述した。そうだからこそ、先生が静を「妻君の為に」（上十）と気にかけ、愛した証しとなる記憶を、「私」の手記は多分に含むのである。このようにして、「私」は静への〈応答責任〉（responsibility）を「真面目」に果たしたのである。

静亡き手記の現在にあって、「負傷と有罪性」を背負う「私」が先人達の死を反復するのに、もはや躊躇いはあるまい。かつて「私」は先生から「貴方は死という事実をまだ真面目に考へた事がありませんね」と指摘されて黙ったが、静が死んで、先生のように「淋しい人間」（上七）となった「私」は、今や眼前の死と「真面目」に対峙しているのである。

## 1　注

拙稿「「こゝろ」の叙法」（『日本文学研究』52号、梅光学院大学日本文学会、二〇一七年一月）及び「〈転移〉する『こゝろ』―ラカンで読む漱石『こゝろ』―」（『日本文学研究』53号、二〇一八年一月）

2　「若い私は」、「其自分の私は」、「私は若かった」などの随所の記述から時を経たことがわかる。

3　フロイトは幼児期に親などの重要な存在に対して抱いた患者の感情や態度が治療者に向くことを〈転移〉と呼び、「それは患者の欲望にすぎない」とする。これに対して、ラカンは、〈分析主体〉（患者）と〈知っていると想定される主体〉（治療者）との間で起こる欲望の移動が〈転移〉であるとみる。『精神分析の四基本概念』（ジャック・アラン・ミレール編、小出浩之・神宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳、岩波書店、二〇〇〇年一二月、原著は一九七三年）参照。

4　*I Confess*　アルフレッド・ヒッチコック監督。モンゴメリー・クリフト主演。製作・配給はワーナー・ブラザーズ。一九五三年三月二二日公開。日本公開は一九五四年四月一五日。原作はポール・アンセルムの戯曲『*Nos Deux Consciences*』（一九〇二年初演）

5　スラヴォイ・ジジェク監修『ヒッチコックによるラカン―映画的欲望の経済（エコノミー）』露崎俊和他訳、トレヴィル、一九九四年七月（原著は一九八八年）

6　「こころ」を生成する心臓」『成城国文学』一九八五年三月

7　『朝日新聞』一九〇八年九月一日～一二月二九日

8　『朝日新聞』一九一二年一二月六日～一九一三年一一月五日（ただし、病気で四月～九月まで中断）

9　『ヒッチコックによるラカン』（前掲）

10　『ヒッチコックによるラカン』（前掲）

11　拙稿「〈転移〉する『こゝろ』」（前掲）で「私」に生じる死の欲動に言及している。

12　『ホトトギス』一九〇六年四月

13　小森陽一「裏表のある言葉―『坊っちゃん』における〈語りの構造〉―」、『日本文学』一九八三年三～四月

14　先行研究に、当時の物理学校の位置づけを詳細に述べた小野一成「『坊ちゃん』の学歴をめぐって―明治期における中・下級エリートについての一考察」（『戸坂女子短期大学年表』一九八五年一〇月）、『坊っちゃん』の立身出世に着目した石原千秋「「坊っちゃん」の山の手」（『文学』一九八六年八月）がある。石原氏は立身出世を求めた坊っちゃんが「江戸っ子」になる物語だと読むが、私見では、坊ちゃんは前近代のエートスと近代性を併せ持つ両義的な存在である。

15　拙稿「〈転移〉する「こゝろ」」（前掲）で言及している。

16　『漱石論　21世紀を生き抜くために』岩波書店、二〇一〇年五月

17　「あの事件」の一文が「勇み足的に今からの把握が混入」したとの見方（藤井淑禎『漱石文学全注釈12　心』若草書房、二〇〇〇年四月）もあるが、本稿では、テクストの破綻の可能性については、作品内での矛盾が確定できない限り退ける。

18　手記の冒頭で先生の本名を明かさないと断り、「世間を憚る遠慮」などと「私」が記すのは、「私」の死後に手記が不特定の読者の目に晒されることまで考慮しているからであろう。

19　浅野洋「『こゝろ』の不思議とその構造」（佐藤泰正編『漱石における〈文学の力〉とは』笠間書院、二〇一六年一二月）が、特に「こゝろ」で反復される死に着目している。

20　藤井淑禎『漱石文学全注釈12　心』（前掲）

21　平岡敏夫「「坊っちゃん」試論―小日向の養源寺―」、『文学』一九七一年一月

22　『ホトトギス』一九〇五年一月～一九〇六年一月に断続連載

※「こゝろ」（「心」）の引用は、『定本漱石全集　第九巻　心』（岩波書店、二〇一七年八月）に拠った。